

独立行政法人国際交流基金から交付を受けた特定助成金に関し、下記のとおり特定助成対象事業実施状況報告をいたします。

記

1 特定助成対象事業者：日印交流年実行委員会

2 特定助成対象事業

(1) 事業の名称

日本語：日印交流年実行委員会事業

(イ) 「歌う民間親善大使」森山良子・スペシャル・コンサート

(ロ) 大学生によるヒンディー語・ウルドゥー語劇公演

(ハ) 講演会「染色技術を通じた日印交流と祇園祭の起源」

(ニ) 日印経済・産業フォーラム

(ホ) 日印交流写真展

(ヘ) パパ・タラフマラ「三人姉妹」公演

(ト) 郷土芸能「石見神楽」公演

(チ) 講演集の出版

(リ) 草の根事業助成

英語：Project of the Japanese Executive Committee for Japan-India Friendship Year

(イ) Special Concert by Ms Ryoko Moriyama, "Singing private friendship Ambassador"

(ロ) Theatrical Drama in & Hindi & Urdu languages by Japanese college students

(ハ) Lecture on Indo-Japanese exchanges through dyeing technique and the origin of Gion Festival

(ニ) Japan-India Economic & Industrial Forum

(ホ) Photo exhibition on exchanges between Japan & India

(ヘ) "Three Sisters" performance by Pappa TARAHUMARA

(ト) Folk entertainment "Iwami Kagura" (Shinto music & dancing)

(チ) Book publication on historical & cultural ties between Japan & India

(リ) Grass-roots Support Program

(2) 事業の実施期間 2007年1月1日～2008年8月31日

(イ) 2007年2月6日～2月15日

(ロ) 2007年2月18日～3月8日

(ハ) 2007年3月20日～3月26日

- (ニ) 2007年9月12日及び2008年2月18日
- (ホ) 2007年11月～2008年2月
- (ヘ) 2008年1月14日～1月21日
- (ト) 2008年1月20日～1月26日
- (チ) 2007年10月～2008年8月31日
- (リ) 2007年1月1日～2008年8月31日

### 3 事業報告

2005年4月、小泉前総理はインドを訪問し、マンモハン・シン首相との間で、両国関係に一層の実質を加え、更に深化させるために日印共同声明（「アジア新時代における日印パートナー・シップ」）に署名し、また、声明の内容を具体化するための行動計画として「8項目の取組」を発出した。

この8項目の中の一つとして、二国間関係の基礎である「文化・学術交流、人と人との交流の強化」が含まれており、これは、政治・経済等の分野での関係強化のみならず、両国民間の相互理解の促進を通じた関係緊密化を図ることが日印関係全体を底上げするために重要であるとの考えに基づいており、日印文化協定締結50周年に当たる2007年に日印両国がそれぞれの国において周年記念事業を実施する旨謳っている。

以上を踏まえ、2007年を「インドにおける日本年」とし、官民学界が一致協力して各種文化・学術・青少年交流等の事業を実施した。

実施にあたっての基本的テーマを「仏教伝来から現代に至るまでの日印の歴史的・文化的紐帯とその発展」とした。仏教の伝来に代表されるように、日本文化の基底には様々な形でインド文化の影響が見られるとともに、両国間には長い文化交流の歴史があるところ、インド国民に日印文化の共通性を認識させ、我が国との共感を育むことのできるような事業を中心的に実施し、インド国民の対日親近感の醸成と相互理解の一層の深化を図った。

同時に、文化的共通点との対比において、日印文化の違い、現代における日印の相互補完性（例えば、インドのソフトと日本の物づくり）を平易に紹介することを通じて、日本文化に対する知的関心呼び起こすことも目指した。

2007年1月～4月の間においては3件の実行委員会事業（森山良子コンサート、大学生によるヒンディー・ウルドゥー語劇、講演会）を実施し、日印交流年の開会式を盛り上げるとともに、インド人に対して原爆の恐ろしさと平和の大切さを訴え、大きな反響が見られた。また、講演会においては、伝統的な染色技法による染色などを披露し、日本の伝統文化に対する関心を呼び起こした。

2007年11月から2月にかけて日印交流写真展が日本及びインドにおいて開催された。2008年1月から2月にかけては、パパ・タラフマラによる「三人姉妹」公演や郷土芸能「石見神楽」公演が開催されるとともに、日印経済・産業フォーラムではインド経済に関する紹介が行われた。また、日印交流年の最後の事業として、2007年に行われた連続講演会の講演録の出版を行った。

また、事業実施期間を通じて、草の根事業助成を実施し、日本及びインドの全国各地において、様々な交流事業が行われた。いずれも、日印交流年の趣旨に合致した有意義な事業を実施できたと考えている。

個別の事業については下記のとおり。

(イ) 「歌う民間親善大使」 森山良子・スペシャル・コンサート

(1) 事業の実施内容の状況

実施日：2月9日、10日、13日

協力団体：在インド日本国大使館

開催地・会場：在インド日本大使公邸

(2) 評価

日本を代表する歌手による日本の歌を紹介し、インド人の日本文化に対する理解を深める目的により、インド人のシタール、タブラ奏者との共演を行い、日印文化交流を行った。森山氏（歌手）、三好氏（ギター）、青柳氏（ピアノ）の日本チームとシュベンドラ・ラオ氏（シタール）、ドゥルジェイ・バウミック氏（タブラ）との共演を実施した。また、13日は、公邸におけるインドにおける日本年オープニングにおいてソロで3曲披露した。参加者数、参加者層は、9日：インド政・経済界要人、ビジネスマン、日本企業幹部、有識者、マスコミ関係者等約130名。10日：大学、日本語学校関係者、インド人大学生、在留邦人等約120名。13日：政治、経済、文化界等要人300名であった。

インドでは日本のポップミュージックに接する機会はほとんどないところ、これはインドの人々に新鮮な体験となった点評価できる。また、インドの打楽器奏者との共演が実現し、日印音楽交流が実施されたことも日印交流年の趣旨に合致するものであり、評価できる点である。

(ロ) 大学生によるヒンディー語・ウルドゥー語劇公演

(1) 事業の実施内容の状況

2月19日：デリー(Lady Shri Ram College for Women)

2月22日：デリー(Daulat Ram College)

2月23日：デリー(NSD)

2月24日：デリー(NSD)

2月27日：コルカタ(Uttam Mancha劇場)

2月28日：コルカタ(Uttam Mancha劇場)

3月2日：ムンバイ(Mysore Association Hall Matunga)

3月3日：ムンバイ(Mysore Association Hall Matunga)

3月4日：プネー(International Institute of Information Technology)

3月5日：プネー(Balgandharva劇場)

協力団体：東京外国語大学ウルドゥー語劇団、大阪外国語大学ヒンディー語劇団

(2) 評価

原爆の悲惨さを分かりやすく、静かに訴えると共に、日本国民の平和に対する願いを理解させ、同時に、核のない平和な世界造りの重要性を再考する機会を提供するとともに、日本にもヒンディー語やウルドゥー語の教育が大学で行われていることを知ることにより、インド国民の日本に対する親近感の醸成を目的としてこの事業を実施した。

戦中の話である「はだしのゲン」と戦後を舞台とした「ある死神の話」は、いずれも「死」が共通のテーマであったが、その割には深刻一辺倒となることなく、むしろユーモアを感じさせる部分も多く、観客席から笑い声が聞こえた。これは、演出の効果もさることながら、大学生の語学力の高さを示していた。作品には切実なメッセージが込められた物語で、核保有国インドで上演することに大きな意義があった。この語劇を通じて学生同士の交流も期待され、今後の日印相互理解に大きな希望ももてる企画であった。聴衆はインド人文化関係者、インド人学生、インドに留学中の日本人学生や演劇愛好家を中心に、いずれの会場でも80~140人程度が集まった。

## (ハ) 講演会「染色技術を通じた日印交流と祇園祭の起源」

### (1) 事業の実施内容の状況

実施日：3月23日

協力団体：インド国際センター（IIC）、在インド日本国大使館

開催地・会場：デリー、インド国際センター・セミナー・ルーム

### (2) 評価

本件講演会は、日印交流の歴史を振り返り、日印の文化的紐帯についてインド国民の理解を深めることを目的として毎月1回開催している連続講演会の第3回講演であり、観客動員の規模は小さいながらも日印交流年の主要行事の1つである。

講演者である吉岡幸雄氏は、日英逐語通訳を介しつつ、ビデオ、スライド、ポスター等の視覚に訴える教材を多用し、時には実際に布を伝統的な染色技法を用いて染色してみせつつ、祇園祭や日本に伝わるインド更紗についての説明を行った。事前広報として、日本文化に関心の高い従来の関係者に加え、デザイン・ファッション関係の学校に講演会の案内を送付しおいたことが奏功し、ファッション関係の学生20人程度を含む聴衆（ほとんどがインド人）が傍聴し、90人程度が入る会場は満員となり、立ち見の出るほどの盛況であった。これら聴衆のほとんどは最後まで席を立つことなく熱心に講演を傍聴していた。

地味なテーマながら多くの聴衆が出席し最後まで熱心に傍聴していたことに加え、従来の日本文化に関心を有する有識者等にとどまらず、美術関係の学生や小中学生など新たな層に対し日印文化交流に関する理解促進を図ることができたのは非常に有意義であったと考える。

## (ニ) 日印経済・産業フォーラム

### (1) 事業の実施内容の状況

実施日：2007年9月12日

協力団体：日印経済委員会、インド商工会議所連合会(FICCI)

開催地・会場：東京商工会議所

### (2) 評価

日印経済委員会はインド商工会議所連合会(FICCI)との共催で、日印経済・産業フォーラムの一環として日印両国間の交流を深める一つの手段として観光の重要性に着目し、「日印観光促進分科会」を開催した。インド側からはソニ観光文化大臣が基調講演を行った。これに引き続き、インド側のホテルや旅行業界の代表から「究極の地一素晴らしきインド」と題してプレゼンテーションを行った。更に州政府及び観光業界からプレゼンテーションが行われた。最後に「日印の観光分野の成長に向けて」と題してインド及び日本の旅行業界や航空業界の関係者間でパネル・ディスカッションが開催され、活発な意見交換が行われた。本セミナーは、約130名が参加し、両国観光事業関係者間の相互理解の促進と交流の拡大に大きく資する行事であったといえる。

### (3) 事業の実施内容の状況

実施日：2008年2月18日

協力団体：日印経済委員会、インド商工会議所連合会(FICCI)

開催地・会場：東京會館

### (4) 評価

日印経済委員会ではインド商工会議所連合会(FICCI)、インド商工省工業局との共催で、日印経済・産業フォーラムの一環として、日印ビジネスサミットを開催した。インド側からはクマール工業担当国務大臣を代表とする官民約30名が参加した。クマール大臣は最近の日印関係の進展状況、デリー・ムンバイ間産業大動脈プロジェクト等についてスピーチを行った。その後、主として本プロジェクトを巡ってプレゼンテーションやパ

ネル・ディスカッションが行われた。

日本側は日印経済委員会委員のみならずインドに関心をもつ人々を含め約200名が参加し、各スピーカーへの質問も活発かつ的を得たもので日本側のインドに対する高い関心を示す行事であった。

#### (ホ) 日印交流写真展

##### (1) 事業の実施内容の状況

11月15日～20日：杉並区日印交流年記念フェアにおいて日印交流写真展を開催（セッション杉並）

1月8日～14日：チェンナイ（タミルナド州立博物館）

1月21日～25日：ムンバイ（マハラシュトラ州立展示会場）

2月5日～10日：コルカタ（ネルー子供博物館）

2月22日～26日：ニューデリー（AIFACS GALLERY）

##### (2) 評価

杉並区日印交流年記念フェアにおいては、期間中5千人余りの入場者が訪れた。

チェンナイにおいては、タミルナド州立博物館及びABK-AOTS同窓会との共催で本件写真展を開催した。本件写真展開会式にはABK-AOTS同窓会等の親日団体、博物館関係者、外交団、学生、プレス関係者等約200人が出席した。同写真展には、合計1,800名（一日当たり300名）近くの来訪者が訪れ盛況であった。来訪者は、日本と何らかの関係を有する人々（日本語学習者、日本留学経験者、日系企業社員及びその家族等）の他、現地の中学、高校生の団体が多かった。本件は現地の新聞等にも取り上げられた。

ムンバイにおいては、ムンバイフェスティバルの一環として行われたが、本件展示会にはムンバイフェスティバル関係者、ムンバイ印日協会関係者、日本語学習者及び一般市民等およそ750名が訪れ、大きな反響を呼んだ。

コルカタにおいては、初日の開会式には来賓としてほとんどの当地駐在各国総領事が来場した。本件展示会への参加者数は1,308名であった。会場が博物館ということもあり、親子連れの入場者が多く、二世世代に対し写真を通して日印関係への理解を深めることができたと言える。

ニューデリーにおいては、写真展オープニングに出席した有識者からは、大変勉強になるので学生を連れて再度見に来たいといった声が聞かれた他、熱心にメモを取りながら見ている出席者もいた。また大使館からはデリー市内の小・中・高校に働きかけ、館員による解説ツアーを実施した。展示初日の模様が現地英字紙に報道された。

#### (ヘ) パパ・タラフマラ「三人姉妹」公演

##### (1) 事業の実施内容の状況

実施日：1月15～16日 於デリー

1月17日～19日 於ムンバイ

協力団体：国立演劇学院（NSD）、ムンバイフェスティバル実行委員会

開催地・会場：デリー、国立演劇学院（NSD）ムンバイ、NCPA TATAシアター

##### (2) 評価

デリーにおいては、本公演は国立演劇学院の演劇祭の一環として実施され、会場は満員（300人程度）で関係者より高い評価を得た。

一方、ムンバイにおいては18日と19日の2日間公演が行われ、それぞれ観客は200名及び500名程度であったが、幅広く一般市民が対象であったため、

在留邦人には笑いを誘う等たいへん高い評価を得た一方、インドの一般市民にとっては、前衛的な日本のパフォーマンスの理解が困難と見受けられた場面もあった。

(ト) 郷土芸能「石見神楽」公演

(1) 事業の実施状況

実施日：1月21日～22日 於ムンバイ

1月24日 於チェンナイ

協力団体：ムンバイ・フェスティバル実行委員会（於 ムンバイ）

ABK-AOTS同窓会タミルナドゥ・センター（於 チェンナイ）

開催地・会場：インド門及びバンドラ・アンフィ・シアター（於 ムンバイ）

ミュージックアカデミー（於 チェンナイ）

(2) 評価

ムンバイにおいては、本件はムンバイフェスティバルの一環として行われ、団員による太鼓と笛の演奏に乗った軽やかなダンス、豪華絢爛な衣装、重厚長大な八岐大蛇等、観客は時には軽やかな、時には重々しい雰囲気をも十分に堪能したと思われる。演奏終了後は、観客が総立ちとなり、惜しめない盛大な拍手が演技を終えた団員に送られた。

チェンナイにおいても、本公演は「塵輪」、「恵比寿」及び「八岐大蛇」の3部から成っていたが、その全演目について観客の反応が非常に良く、終了時には全観客が総立ちで拍手するなど大盛況であった。観客は、「塵輪」においては絢爛豪華な衣装と勇壮な舞い、「恵比寿」のユーモラスな鯛釣り踊り、そして最後の「八岐大蛇」においては巨大な4匹の大蛇が若い娘を飲み込み、酒を飲んでのたうち回る迫力の舞に興奮・感激し、子供も含めやんやの喝采であった。また、太鼓や笛、謡による囃子も極めて効果的であり、全体としてスペクタクル性もあり、日本文化紹介上非常に優れた内容の公演であった。

(チ) 講演集の出版

(1) 事業の実施状況

2007年1月より毎月1回、シリーズで実施した日印両国の有識者や学者、文化人による日印両国の歴史的・文化的な紐帯に関する講演内容を記録として残すために出版した。

(2) 評価

本講演は日印関係における様々な分野の第一人者による現地での講演を書物にしたものであり、今回の交流年事業を国民に広く広報する観点から有益であったといえる。

(リ) 草の根事業助成

(1) 事業の実施状況

(a)日本の団体によるインドでの事業：8件

(b)日本の団体による日本での日印共催事業（ICCRとの共催）：11件

(c)インド国内の団体によるインドでの事業：12件

(2) 評価

(a)、(b)、(c)それぞれの特徴のある事業を通じて、日本の団体は日本文化やインドと日本文化の共通性などをインドの人々に伝えることができた。また、ICCRとの共催事業においては、日本ではなかなか見ることのできないインドの舞踊家によるインド舞踊が日本全国で公演され、日本人や日本在住のインド人にとって大変貴重な機会となった。また、インド国内の団体は、インド人による日本文化の理解と広報という現地において最もニーズを踏まえた事業を企画し、今後の日印交流の基礎が築かれたといえる。今回の草の根事業助成は、どちらか一方の文化の押しつけではなく、本件事業を通じて両国の文化交流が促進された点において、大成功であったといえる。

(別紙) 草の根助成事業について

1. 日本の団体によるインドでの事業：8件
2. 日本の団体による日本での日印共催事業（ICCRとの共催）：11件
3. インド国内の団体によるインドでの事業：12件

1. 日本の団体によるインドでの事業

(a)事業名：インド日本友好親善交流2007

主催者名：インド日本友の会

実施期間：2007年7月14日～22日

評価：今回日本文化として、伝統芸能の「石見神楽」と「和太鼓」を3公演中2公演を野外ステージにて披露。現地でのお祭りも同時に開催され、日印文化交流イベントとなった。インド地方での公演は、日本の伝統芸能に触れる機会の少ない人々に対し、貴重な機会をもたらし、文化の相互理解という目標は達成できたといえる。

(b)事業名：第11期日本インド学生会議 本会議

主催者名：第11期日本インド学生会議

実施期間：2007年8月15日～9月7日

評価：日本の大学生10名がインドの3都市（コルカタ、デリー、プネー）をまわり、現地の大学生と世界的なテーマについてディスカッションを行った。世界の環境問題などに関し有意義な意見交換ができ、また友情を築くことができた。

(c)事業名：日本の生活文化・伝統工芸「支える匠の技」展

主催者名：江戸職人国際交流協会

実施期間：2007年11月15日～28日

評価：南インドのチェンナイにおいて日本の職人による展示・パフォーマンス・ワークショップを通じてインドに日本の生活文化や伝統文化を紹介するイベントを開催。会場、学校いずれにおいても各ブースは人であふれかえり、大変な人気を博した。日本の伝統文化に対するインド人の関心の高さに参加した職人も驚いた様子であった。大変有意義な交流ができた。

(d)事業名：Japanese KOTO Music 350年の歴史の流れから未来へ

主催者名：沢井箏曲院

実施期間：2007年12月2日～4日

評価：インドにおいて、古典箏曲「六段の調べ」に始まり、1970年代から90年代に作曲された現代曲の他、インド国内でよく知られている曲を箏と尺八での演奏を行った。ハイレベルな演奏であり、収容人数350名に対して5,000枚の招待状チラシを郵送したにもかかわらず、観客がやや少なかったのが残念であった。

(e)事業名：インド古典舞踊と日本文化の融合「インドの惑星の神々と日本の神々」

主催者名：インド舞踊研究所

実施期間：2007年12月16日～24日

評価：インドの伝統的な古典舞踊と音楽、日本の伝統的な音楽、書道の一見大きな違いがあるような芸術を、ダンスパフォーマンスでつなぎ、新たな文化の道を開く目的で開催された。アジアの伝統芸術の融合のおもしろさを観客に体感してもらうことができた。

(f)事業名：和太鼓公演

主催者名：早川太鼓

実施期間：2008年1月30日～2月4日

評価：インドで開催されたムンバイフェスティバルに参加。太鼓演奏を通じて、日本文化の紹介と両国の交流を図ることができた。

(g)事業名：日本紹介映像上映会 in India

主催者名：財団法人NHKインターナショナル

実施期間：2008年1月10日～22日

評価：インド・ニューデリーとムンバイの大学を会場に日本紹介映像（DVD、51作品）を37型の液晶画面で上映。ニューデリー会場では延べ2,700人、ムンバイ会場では延べ240人の学生が本映像を鑑賞し、日本理解を深めることができた。

(h)事業名：邦楽と日印音楽祭典

主催者名：日印音楽交流会

実施期間：2008年3月8日～22日

評価：日本の古典音楽（箏曲、地歌、尺八音楽、うた）を演奏し、日本文化を紹介するとともに、日本の古典楽器（箏、尺八）によるインド古典音楽を演奏することによって両国の音文化間にある共通性と可能性を紹介。現地演奏家との共演を通じて両国間の文化交流を達成。

2. 日本の団体による日本での日印共催事業（ICCRとの共催）：11件

(a)事業名：インド古典舞踊

主催者名：ICCR&日印交流を盛り上げる会

実施期間：2007年4月6日～23日

評価：インド7大古典舞踊の一つ、クチプディを芦屋市（兵庫県）、島根県隠岐郡など日本の地方都市にて公演。南インドの古典音楽が子供から大人まで幅広い層に紹介され喜ばれた。

(b)事業名：インド古典舞踊

主催者名：ICCR&日印交流を盛り上げる会

実施期間：2007年7月19日～27日

評価：インド7大古典舞踊の一つ、バラタナーティヤムを山口、広島、大阪等にて公演するとともにワークショップを開催。山口県でのインドフェスティバルでは2000人の来場者となり大成功を収めた。

(c)事業名：ペナーズ・マサーニー・コンサート

主催者名：ICCR&日印交流を盛り上げる会

実施期間：2007年8月30日～9月5日

評価：インド国内外で知られるポピュラー歌手を迎え、東京、横浜、神戸で公演。インドの魂の歌と言われるガザール歌手である彼女の歌は、日本人の心にも深い印象をもたらしたと言える。

(d)事業名：インド古典舞踊

主催者名：ICCR&日印交流を盛り上げる会

実施期間：2007年9月25日～10月1日

評価：インド最北西パンジャブ地方の民俗舞踊バングラを、ナマステ・インディアを始め、九州のインドフェアにおいても公演。多くの観客が鑑賞した。

(e)事業名：インド古典舞踊

主催者名：ICCR&日印交流を盛り上げる会



実施期間：2007年10月18日～25日

評価：インド7大古典舞踊の一つオリッシーを公演。3年前の愛地球博でインド受け入れ友好市となった刈谷市においてはインド舞踊学習者へのワークショップも開催され、インド舞踊に対する理解を深めた。

(f)事業名：インド古典舞踊

主催者名：ICCR&日印交流を盛り上げる会

実施期間：2007年10月26日～11月1日

評価：インドの古典楽器ルドラ・ヴィーナの演奏公演。この楽器の演奏は非常に難しく、後継者がなかなか育たない中、数十代続く巨匠と言われるインドの演奏家、ウスタッド・アサド・アリカーンが来日し、インド音楽の真髄を披露するという非常に貴重な機会であった。

(g)事業名：インド現代バイオリン演奏

主催者名：ICCR&日印交流を盛り上げる会

実施期間：2007年11月15日～24日

評価：南インド・カルナータカ古典音楽のバイオリンを代表するだけでなく、世界のオーケストラと共演・作曲、また著名なジャズミュージシャンと共演など、50枚以上のCDを出している天才バイオリニストLスブラマニアン公演は、多様なジャンルを世界レベルでこなす技術とともに、南インド独特の文化背景をもった同人の魅力によって、多くの観衆を魅了する公演会となった。

(h)事業名：インド現代音楽 オーシャン・グループ公演

主催者名：ICCR&日印交流を盛り上げる会

実施期間：2007年12月3日～7日

評価：インドのロックバンドといっても、4人のミュージシャンは文化の土台をインドの根っこにおいていた。西洋のロックとは異なった独特な世界が聴衆に強い印象を与えることができた。

(i)事業名：インド古典舞踊 カタック公演

主催者名：ICCR&日印交流を盛り上げる会

実施期間：2007年12月7日～13日

評価：フラメンコ、ジプシーのルーツはインドという説もあり、カタックにはフラメンコ的な要素や歌舞伎につながる見栄を切る所がある。全ての会場で参加者や中学生などに感動を与え、成功であったといえる。

(j)事業名：インド民俗アート展

主催者名：ICCR&日印交流を盛り上げる会

実施期間：2008年2月12日～3月14日

評価：インドの先住民ワルリー族の描き手が会場で公開制作する展覧会はインドの多様な文化を人々に知らしめ、大きな広報効果があったと認められる。

(k)事業名：インド古典舞踊 オリッシー公演

主催者名：ICCR&日印交流を盛り上げる会

実施期間：2008年2月28日～3月4日

評価：日印交流年開始当初と比較し、会場がほぼ満席となるくらい盛況であった。一年を通じてインドの古典舞踊などインドの文化が日本の地方を含む多くの都市で披露され、インド文化に対する理解を深める一助になったと言える。

3. インド国内の団体によるインドでの事業：8件

(a)事業名：書道一日教室

主催者名：JAPROC (AOTS 同窓会運営の日本語教育機関)

実施期間：2007年10月26日

評価：琉球舞踊の紹介と、日本の書道に関する説明、実演、参加者による実技及びその作品に対するコンテストが行われた。当初の予想よりも多い70名余りの参加者が

得られ、日本の伝統文化紹介という目的は達成できたといえる。

**(b)事業名：日印協力会議**

主催者名：平和・紛争研究所（IPCS）

実施期間：2007年11月16日

評価：日印関係につき、日本より田中明彦教授、インド側よりアンジャイ・ロイ F I C C I 顧問、アルジュン・アスラニ元駐日大使がパネリストとして出席。田中教授が日印政治・安保関係の現状と展望につき発言し、アスラニ大使より日印政治関係の現状と展望につき発言、アンジャイ・ロイ氏より日印経済関係の現状と展望につき発言し、その後聴衆を交えて活発な議論が展開されるなど、日印政治交流に大きく貢献したと言える。

**(c)事業名：全国オンライン日本クイズ大会**

主催者名：カーネル・サトサンギ・キラン・メモリアル（CSKM）

実施期間：2008年1月25日

評価：全国3000人以上の学生が日本に関するクイズにオンライン参加し、日本に対する関心を高めることができたと言える。

**(d)事業名：日本文化紹介展**

主催者名：ナシック印日協会

実施期間：2008年1月5日～10日

評価：日本文化に触れる機会の少ないインドの地方都市（マハラシュトラ州ナシック市）における和風等の展示会は日本語学習者を始め日本に興味を持つ学生を中心に歓迎され、効果が高かったと言える。

**(e)事業名：空手インド国内大会**

主催者名：日本空手道協会インド支部

実施期間：2008年1月27日～2月2日

評価：空手道インド国内大会の実施及び日本からの師範級インストラクターによる空手道デモンストレーションが実施されたが、いずれも日頃の成果を競い合う大変熱気のある催しとなり、当初の目的を達成できたと言える。

**(f)事業名：日本文化紹介展**

主催者名：ムンバイ印日協会

実施期間：2008年1月31日～2月1日

評価：ムンバイフェスティバルの一環として、日本古典文化の生け花、盆栽、折り紙などの展示会を実施。生け花や盆栽については、現地でも多くの人々がこれらの芸術を学んでおり、日本語学習者を中心に、日本に関心を持つ多くの市民が鑑賞し、目的を達成できたと言える。

**(g)事業名：生け花・盆栽・折り紙展**

主催者名：プネ印日協会

実施期間：2008年1月10日～13日

評価：日本語学習者が一番多いプネにおいて生け花、盆栽、墨絵の展示会を実施し、更なる日本への関心の高揚、対日理解促進を図ることができたと言える。

**(h)事業名：新井富美子・バラタナティアム公演**

主催者名：ヌリチャ・カウストヴァ文化協会

実施期間：2008年2月17日

評価：公演の前半ではインドの古典舞踊であるバラタナティアムを披露し、日本人のインド舞踊に対する関心をインドの人々に印象付けた。また、後半では万葉集を題材にした創作舞踊を披露し、インドの人々に日本人の自然観や情緒を紹介し、現地メディアでも取り上げられるなど高い関心を得ることができた。

**(i)事業名：ガンジス川に関する日印シンポジウム**

主催者名：日印文学・文化協会

実施期間：2008年2月5日

評価：ガンジス川に関する日印双方の研究者による詩の朗読や講演会。ガンジス川を通じた両国間の文化交流という目標を達成できたと言える。

(j)事業名：歌人俵万智の短歌ワークショップ

主催者名：日印文学・文化協会

実施期間：2008年2月2日

評価：歌人俵万智の短歌の英語やヒンディー語への翻訳を通じて、日本文学を理解するという当初の目的は達成されたと言える。

(k)事業名：日本文化祭

主催者名：ネルー大学日本語学科

実施期間：2008年3月28日～30日

評価：初日には日本文化に関するセミナーが開催され、インド人日本研究者による講演が行われた。2日目、3日目には書道や浴衣、日本食や生け花など幅広い日本文化紹介が行われ、インドにおける日本文化紹介に貢献した事業であったといえる。

(l)事業名：池坊生け花デモンストレーション

主催者名：インド文化研究協会

実施期間：2008年3月13日、16日及び19日

評価：デリー（13日及び19日）及びベナレス（16日）において池坊生け花デモンストレーションを行った。大学を会場にして行われた13日と19日はそれぞれ250人、350人あまりの参加があり日本の伝統文化紹介の目的は達成できたといえる。

（了）